

IS 百人一首が好きなただの男

marekunn

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ISを起動させてしまった如月智希。変わった人間や優秀な人間、天才な人間に囲まれた中で彼はどんな生活をするのだろうか。

あらすじ、タイトルは無視していくかもしれません。

# 目次

第4話	第3話	第2話	第1話
16	11	5	1



# 第1話

IS、一人の天才、篠ノ之束によつて宇宙開発の為に作られ、今はスポーツ兼軍用として世界中で研究されている。

だがISを作るのに必要なコアの作り方さえ解析されておらず篠ノ之束が作ったコアしか存在していない。そのため外交の手としても使われている。

ISの機能としては飛行機能、生命維持機能、収納機能などがある。特に生命維持機能は絶対防衛と言われるほど。

まあ、いろいろISについて説明してみたが一番大事なのは女にしか乗れないってことだ。

男のオレにとっては社会問題になろうとどうにもできないしどうともしようと思えないものだ。

だけど今オレはISを学ぶ学校の前にいる

なんでオレはこんなところに来てしまったのだろう

全部あの時のせいだ

「智希、デパートでISの展示があるらしいから見に行こうぜ。」

「まあ、良いよ。行くか。」

こいつって女嫌いじゃ無かったっけ

ISってことは女の人が多いと思うのだが

まあ、気にしないけど

デパートまで来たが

「人が多い。」

全然ISなんて見えない

「いやいや、そりゃISが展示してあるんだし普通だろ。」

「そんなもんなのか？」

「とりあえず近くまで行こうぜ。」

人をかきわけ前に進む

ISの前までたどり着いたのだが

「思ったよりなにも無いな。」

人が乗ってないし

そもそもオレは機械に興味が無いからな

「いや、このフォルムに思うこと無いのかよ。」

「残念ながらオレが好きなのはロボットはナイトメアフレームだからな。」

あの回り方とかマジかつけー

「お前はリアルに存在するISに感動しないのか。」

「二次元で充分なんだよ。こんなロボットは。」

こんな物のせいで社会が傾くとかやめていただきたい

パンっパンっ

「オメエら動くな！コイツがどうなっても良いのか。」

拳銃を持った男が騒いでる

女尊男卑に対するデモらしい

周りがざわざわして慌てて逃げようとするやつらも出てくる

正直二人ぐらいならこっそり逃げれそうだな

ドン

何かに押された

「まず、オメエらISから離れろ。」

言われている事と反対に I S の方に倒れていく

視界が白くなる

なんかいろいろなものが頭の中に入ってくる

オレは I S を起動していた

そのあとは犯人が驚いている内に捕まり、オレは逃げようとしたが I S の外し方がわからず逃げられず、駆けつけてきた関係者と話し合いになり I S 学園に入学することが決まった

「で、今に至ると。」

「はあー」

大きいため息を吐きながら歩きだした

馴れるまでどんだけの幸せが逃げるのだろうか

「はあー」

## 第2話

オレは一組らしい

唯一の救いでオレと同じ男がいるらしい

それでもオレとそいつしかいない

嫌だなど思いながらドアを開ける

「おはよう。」

一応、挨拶とかしてみる

みんな、ひそひそと話をしている

まあ、珍しいからしようがないのだろう

でも、これからずっとこれはキツイな

ガタッ

「シヨウタ!？」

自己紹介があるだろうが言っておこうオレの名前は智希だ。

読み間違いでもシヨウタは無いと思う

女の子が近づいてくる

見覚えがある

というより知ってる

「なんでいるの?」

「オレに秘められし力でISが起動してな、オレもよくわからない。

てか、佳奈もなんでここにいるんだよ。」

本当にわからない

佳奈は小、中とずっとクラスメサイトだ

簡単に言えば幼なじみ

「ロボットつかってかっこいいじゃん?」

おまえここの倍率をバカにしてるよな

何人がこの学園を目指して泣いていったと思ってるんだ

キーンコーンカーンコーン

「おっと、席に行かないとな。」

「また後でね。」

席についたがなかなか先生が来ない

「ちよつと良いか?」

横から声をかけられた

男ってことは織斑か

「どうしたんだ、織斑。」

「いや、男は二人だけだし仲良くしたくてな。もう視線が苦しいんだよ。あと一夏でいいぞ。」

「そうだな。一夏、仲良くやって行こうぜ。オレの名前は如月 智希だ。智希って呼んでくれ。」

「ああ、わかったよ。智希。」

ガラガラ

おっと先生が来たな

先生の紹介は省こう。とりあえず名前は山田真耶だ

名前が回文になってたからやまやと呼ばれている

たぶん童顔のせいで親しみやすくなってるんだろう

で、今は生徒の自己紹介

日本の人が多いけどそれ以外もいる

個性的な外見が多いな

「次は織斑くんの番です。…織斑くん？」

「はっ、はいっ！」

絶対話を聞いてなかったろ一夏

ほら、いきなり大声だったから山田先生の目が潤んできてる

「お、織斑くん。わたし、なにかいけないことでもしましたか？」

「い、いいえ。なにもしてません。大丈夫です！」

また大きな声をだすから山田先生の目が：

「じゃ、じゃあ、自己紹介をお願いします。」

二人だけの男児ということで周りからは期待のまなざしが：

「えーと、織斑一夏です。」

「それだけ、ですか？」

「はい。」

ズコー

クラス的女子は落胆により滑るオーバーリアクション。

基本的に今日会うのが初めてだよな？なんでぴったりとそろってんの？

「では、次の方。」

オレの番のようだ

さつき一夏は散々やらかしたからな

オレは普通にやろう

「オレの名前は如月 智希 趣味兼特技は百人一首です。」

かなり当たり障り無いと思うな、我ながら

「正直に言うと、この女子でしかも知らない人ばかりしかいないこの状況は苦しいので優しく接してください。」

これは本音だ

こんだけ言えば大丈夫だろう

「それでは質問はありませんか？」

あれ、そんなコーナーが今まであったっけ？

「好きな「付き合」「IS」の「タイ

みんな言い過ぎて聞こえない

少し耳が痛くなる大きさの声だ

「はい、手をあげて質問をしてください。」

「身長は何センチですか？」

「180位です。」

「ISにはなぜ乗れるんですか？」

「危機に瀕して力に目覚めました。」

「付き合っている人はいますか？」

「いません。」

なんか佳奈が笑っている

人の不幸を笑いやがって

「そろそろ次にいきますよー。」

やっと質問責めから解放された

## 第3話

「これで全員の自己紹介がおわりましたね。そろそろ担任の…」

ガラガラ

突然教室に入ってきた女性。あまりにも有名な人。世界的な俳優なんかよりも有名なISの世界最強を決める第一回モンドグロツソを近接ブレードだけで勝ち抜いた圧倒的な強さを持つ。そしてISで二人しかいない男性操縦者、織斑一夏の姉である織斑千冬。

「「「キヤー、千冬様よ!!」「」」

「千冬姉!!」

狂った様な女子たち。いくら有名人だとはいえ所詮スポーツ選手だぞ？

バンツ

大きな音がしたかと思うと一夏が机の上で頭を押さえて悶えていた。

…あの一瞬で叩いたのか？それであの音？速さは重さですよね？

「学園内では織斑先生と呼ぶように。」

確かに一夏が悪いがこれは同情せざるおえない。

「は、はい。わかりました、織斑先生。」

「よろしい。私がこのクラスの担任になった織斑千冬だ。貴様らが在学中の三年間でI Sの基礎を完全に叩き込む。学園内では私の指示に従え。よろしい者は返事をしろ。よくないやつも返事をしろ。わかつたな。」

「「はい!!!」」

やばい。恐怖政治が始まりそうだ。

自己紹介が終わり休み時間になっていた

今は囲まれている。

それしか言いようがない。

一夏も囲まれている。

一夏の方が囲まれてる。

やっぱ有名な姉を持つと違うね。

男が珍しいからって他のクラスからも集まるってすごくないか？

そんなことも考えるけどとりあえず

助けて欲しい

ちらちら佳奈がこっちをみて笑っている

いつそ巻き込んでやるか

ごめんねと断り立ち上がる

「おーい佳奈、久しぶりだな。」

視線が一気に佳奈に向く

「二人で話したいことがあるんだ。ちよつとついてきてくれないか？」

「えっ、わかった。」

ちよつと驚いていた

周りでは二人に対する考察が始まっていた

「二人で話したいことってなんなの？」

「いや、特に無いけど。逃げたかっただけだよ。」

「そうだよ。ケイタはそういうやつだもんね。知ってたんだ、知ってたんだけど……」

ぶつぶつと何か言っている

「もしかしてなにか特別なことがあるとでも思った？」

「いや、なんにも期待なんてしてなかったよ。」  
「まあ、これからも逃げ出すためとかに呼ぶからよろしく。佳奈しか頼れる人がいないからな。おっともう時間になるな準備しようぜ。」

初めての真面目な授業

一夏がやらかしている

なんと参考書を電話帳と間違え捨てたらしい  
とてもバカだと思う

一応だけどここはエリートの集まりだからな

倍率とかヤバイ筈だし  
てかヤバイ

オレはギリギリ大丈夫だ

知り合いにISについて詳しいのがあるんだよ

ちなみにオレの学力は暗記科目はほぼ死んでいる

それ以外はかなり良い

今、一夏は織斑先生に出席簿で頭を叩かれている

普通は出ない音が出ている

むしろ出せないなああの音は

「如月、お前は大丈夫なのか？」

オレにまで槍先が向いてきた

「厚い参考書のおかげで大丈夫です。」

「智希、おまえ頭良かったのか……」

いやいや、どこを見て頭を悪いと判断したのだろう

そんな脳筋みたいな感じじゃないだろうし

だいたい、眼鏡っ子だぜ？

考えているうちにまた叩かれてる

鐘がなる

ほとんど一夏が怒られてるので授業が終わったな

## 第4話

またまた休み時間

今回は周りに人が寄って来なかった

一応、一段落ついたということだろう

とりあえずゆっくりさせてもらう

「そういえば、一夏つてこの中に知り合いとかいたのか?」

「いたぜ、幼馴染みが。智希はどうなんだよ。つてさつき呼び出してたもんな。」

「ああ、オレも幼馴染みがいたよ。」

オレと大差は無い状況らしい

少し安心だな

「ちよつとよろしくて?」

特徴的な長い金髪でお嬢様ですよオーラを放っている女子が声をかけてきた

「なにかな? セシリア オルコットさん」

こんだけ特徴的な髪型してれば流石にオレでも覚えてる

「そうです。私が代表候補生のセシリア オルコットです。」

「なあ、代表候補生ってなんだ？」

一夏、お前は始まったばかりの学園生活をどれだけ乱したいんだよ

まあ、知らぬは一生の恥とも言うよな。それでもこれは…:

オルコットが固まっている

「おまえ本当に知らないのか？」

「ああ、何なんだよ。教えてくれよ。」

「参考書を捨ててるんだったな。」

おまえの姉は日本代表でモンドグロツソ、世界大会に出てただろ？その代表の候補だよ。」

「ああ、わかったよ。とりあえず、すごいんだな。」

おまえ、その言い方はプライド高いやつには

「あなた、私をバカにしておりますの？」

「そんなことしてないって。おまえすごいやつなんだろ？それよりもう授業始まるぜ。」

「次の休み時間、逃げないでくださいね！」

急いで席に戻るオルコット

オレには一夏がオルコットを煽っているようにしか見えないが一夏のことだからそ

んなこと考えないで言ってるよな…

「なあ、なんだったんだ。あれ。」

「一夏、おまえが自滅することになるぞ。」

「どういふことだよ。」

「そのままだよ。」

キーンコーンカーンコーン

なんか鐘の音が虚しく聞こえてしまうよ

「クラス代表を決めようと思う。立候補でも推薦でも構わんぞ。」

こういうのは関わらない方が良いだろう

ただでさえ学園生活が苦しいからな

「織斑くんが良いと思います。」

私もーとどんどん続いていく

反論しても織斑先生による物理攻撃で帰ってきている

こ愁傷さま

「わたしは如月くんが良いと思います。」

オレの平穩を奪う気が

しかし反論したら物理攻撃でくるからなにも言えない  
パンツと机が叩かれた

「待つてください。このような男を代表にして私に一年間、屈辱を味わえと仰いますの？ だいたいこんな極東の猿に「オレはオルコットさんが良いと思います。」

「智希、おまえ馬鹿にされてるのにいいのかよ。」

あんたは馬鹿にされてることに気づくんだな

「この程度でで争う必要無いし、ISに馴れてるやつがいるならそれで良いだろう。」

これ以上の話しはウザイだけだしな

「そうですね。男はおとなしくしていればいいんですわ。」

「おまえも勘違いするなよ。今はクラス代表程度のことだから別にいいが、本当に周りの人間を馬鹿にするなら

「そこまでだ。」

織斑先生が言う

「おまえら三人で一週間後、試合をしてもらおう。そこで勝ったやつが代表だ。良いな？」

二人はやる気がありますよといったオーラを出していたがオレは正直どうでも良かった

で放課後になった

放課後まで二人はずっとぴりぴりしてた

普通に嫌だった

まあそこはどうでもいいとして今は職員室に呼び出されている

「あつ、来ましたね。まずはこれ寮の鍵です。」

1042と書かれている

どうせ一夏と一緒だろ

「次に専用機の話なんですけど、クラス代表を決めるまでには届かないそうです。ですが武装が2つ送られています。」

流石に急に早まったら完成してないよな

「あの少し質問してもいいですか?」

山田先生が聞いてくる

「なんですか?」

「あの、なぜレインボウの会社の専属になったんですか?」

レインボウはここ数年で急激に名をあげたISの開発をしている会社だ  
「知り合いが立ち上げた会社だったんで。」

山田先生が驚いている

「立ち上げた人ってことは神有月 桜さんと知り合いつてことですか!？」

「まあ、兄弟ですけど。」

「えっ!でも名字が違いますよ?」

「ただの偽名です。姉は目立つことをたくさんしてるんで偽名を使っているんです。」

「そうだったんですか。あの神有月桜さんのご兄弟ですか。」

あ、送られてきた武装のひとつがバットとようなものだったんですけど。」

「野球やってたからじゃないですかね?」

「割りとテキトーなんです。質問はもうありません。ありがとうございました。」

とりあえず部屋に行くか